

くじゅう坊ガツル湿原の植物

阿蘇くじゅう国立公園の標高1,200 mから1,250 mの緩斜面に位置する坊ガツル地域は、東を平治岳と大船山、南を立中山、西側を三俣山に囲まれた盆地状低平地で、そこに広がる湿原とその周りの地域で確認された維管束植物（シダ植物、種子植物）は77科364種です。

湿原には、くじゅう山群だけに生えるクジュウノガリヤスや北方寒冷地の植物、レッドデータブックのリストに挙げた植物、国立公園の指定植物などが多く生育し、季節ごとに湿原を彩って、くじゅう山群の山岳や渓谷とは異なった自然景観が見られます。



春のヌマガヤ湿原（5月上旬）
谷部のヌマガヤ群落が氷で浸食され、株が大きくなって谷地坊主のように発達したヌマガヤ



リュウキンカ〔IB〕（5月中旬）



エゾミソハギ（8月上旬）

植物名に付した〔 〕は、大分県の絶滅危惧危険度のランクです。

湿原の季節を彩る

坊ガツルの中ほどのキャンプ場より南側一帯にはミズゴケ類を伴ったヨシ湿原やヌマガヤ湿原が発達しています。

春は黄色のリュウキンカ、青色のハルリンドウに始まり、初夏にはノハナショウブの紫、ホソバオグルマ、クサレダマの黄、夏にはエゾミソハギの紅、コウライトモエソウの黄、秋にはシラヒゲソウの白、オタカラコウの黄、晩秋には紫色のリンドウが花開き、風に吹かれてヨシやススキの白い穂波がなびきます。これら以外にも多くの湿原植物が季節を彩っていきます。



シラヒゲソウ〔Ⅱ〕（9月上旬）



オタカラコウ（9月上旬）

湿原には多くの北国の植物が

くじゅう山群でも高所にある坊ガツル湿原には、寒冷期に南下したヌマクロボスゲやモウセンゴケ、サワギキョウなどの多くの湿原植物が群生しています。この地が南限となっているものが多いようです。



谷地坊主をつくるヌマクロボスゲ〔IB〕（5月下旬）



モウセンゴケ〔準〕（8月上旬）



サワギキョウ〔Ⅱ〕（8月上旬）

湿原の植物いつまでも

坊ガツル一帯には、阿蘇くじゅう国立公園の指定植物が45種、レッドデータブックのリストには環境省11種、大分県43種の植物が挙げられています。クロイヌノヒゲモドキは県内で初めて発見されました。

これらを含めた多くの植物が生育している湿原がいつまでも続いて欲しいものです。野焼きはノリウツギの侵入やササ類の群生を抑え、多様な植物が生き続けていく、人の力添えだとされています。



ツクシイヌイ〔IB〕（6月中旬）



ミズトンボ〔Ⅱ〕（8月上旬）



クロイヌノヒゲモドキ（9月上旬）



クジュウノガリヤス〔IB〕（10月上旬）



湿原は長い冬を迎える（10月下旬）

坊ガツルの冬は早く、10月に入ると湿原の植物は枯葉色となり、春を迎えるまで地下で長い冬を過ごしていく。